

第1章 生産と賃銀（賃上げ闘争は無意味なのか）

司会…さていよいよ本文に入っていきます。前置きと第1章を担当したのは三好市職友の会の大西さんです。レポート後に、質疑討論を行います。司会は徳島県協の吉田が務め、助言者は全編をとおして香川県協の柳本さん、須藤さんをお願いします。それでは大西さん、よろしく願います。

賃上げ闘争は無意味なのか

本書は、マルクスが1865年6月20日及び27日に第一インターナショナル（国際労働者協会）の中央委員会でを行った講演であって、イギリスの労働

組合員で、インターナショナルのメンバーだったウェストン（古いオーウエン主義者）の見解を批判したものです。

ウェストンの主張は次の二つでした。
①一般的な賃金値上げは物価も同様に上がるから、労働者たちにとって何の役にも立たない。
②だから、労働組合は有害な作用をする。

当時ヨーロッパ大陸では労働者階級の賃金闘争が高揚していました。結成間もない第一インターナショナルには、「空想的社会主義者」や「無政府主義」、「改良主義」など雑多な潮流が入り交じり、このままでは労働者の闘い

を否定することになりかねず、誤った考え方を論破するため、ひどく退屈な思いをさせる危険を冒してでもマルクスは講演を行いました。

さて、ウェストンの主張は、これだけ時代が進んだ現代でもなお、よく経営者側から言われる常套句（ジョーシヨウ）です。彼の主張の2つの前提として、「①国民生産物の額は固定したものであり、不変量であるから、賃上げ、つまり物を今までより多く買うことができたとすれば、生産物が不足し、結果物価が上昇する。それならば結局、価格が高くなった生産物を買うことになり、賃上げは相殺される。そのため、②労働組合



学習に取り組む四国ブロックの仲間

による賃上げのたたかいは、実質賃金は変わらないから労働者総体にとつても有害で無駄だろう」ということです。果たしてそうなのでしょうか。

全ては固定せず変動している

ウェストンの主張は誤りであり、それは当時でも一目瞭然でした。国民生産物の額ないし数は、絶えず変動するのです。それは、不変量ではなくて可変量であり、人口の変動を度外視しても、そうでなければなりません。年々、生産物の価値と数量は増加し、国民労働の生産諸力は増大し、この増加する生産物を流通させるのに必要な貨幣の額は絶えず変動していることを誰もが知っています。資本の蓄積と労働の生産諸力が絶えず変動しているのです。もし賃金率全般の高騰が今日起こったとしても、先々の結果はどうなるにせよ、この高騰が、それだけで直接に生産額を変化させるものではありません。たとえ、賃金が上がる前に国民生産物が可変であつて固定でなかったなら、賃金が上がった後でも引き続き可変であつて、固定はしてはいけません。

総額が固定しても

賃金は固定していない

ウェストンの主張に同意して、国民生産物の額が可変ではなくて不変であると仮定しましょう。例えば、生産物の総額が8であるとします。ある時点で資本家の取り分である利潤が6で、労働者の取り分の賃金が2であつたとしても、賃金が6に増え、利潤が2に減ることもありうるのであつて、それでもやはり総額は8のままです。このように、生産額が固定だということは、けつして賃金額が固定だということの証明にはなりません。

では、ウェストンは、賃金額のこの固定性をどのようにして証明するといふのでしょうか？ たゞそれが固定している主張することのみによつてだけであり、まったく根拠がありません。

●生産額が固定であれば賃金も固定されているのか

利潤6	賃金2
-----	-----

利潤2	賃金6
-----	-----

どちらも生産総額は8

生産額が固定だということは、けっして賃金額が固定だということの証明にはならない。

仮に一步譲つて彼の主張に同意するとしても、その主張は両側面に当てはまるはずなのに、彼はその一面だけを主張しています。もし賃金額が一つの不変量だとすれば、それは、増やすことも、減らすこともできない。もし労働者が一時的な賃上げを強要することが愚かな行動だとするウェストンの主張が正しいなら、資本家が一時的な賃下げを強要することも、それに劣らず愚かな行動だということになります。資本家は賃下げを強要できるし、事実絶えず強要しようとしていることは事実です。賃下げの企てや実行に反対する反動は、全て賃上げ要求の行動であるから、これらの賃上げを強要する労働者の行動も正しいことです。むしろウェストン自身の賃金不変の原則に従えば、労働者は、一定の事情のもとでは、団結して賃上げ闘争をしなければならぬこととなります。ウェストンは、賃金額は一つの定量だなどと言わない

で、「賃金額は上がることはできないし、上がつてはいけませんが、資本がこれを引き下げたいと思うときにはいつでも下げることができるし、また下がらないわけにはいかない」というべきでしょう。

資本家の力の限界と

性格を探索する

例えばアメリカではイギリスよりも賃金が高い場合、この賃金率の相違を、アメリカの資本家の意志とイギリスの資本家の意志との相違と結論付けていいのでしょうか。確かに資本家の意志は、できるだけ多く取ることです。そこで私たちのなすべきことは、資本家の意志を論じることではなくて、資本家の力、この力の限界、この限界の性格を探究することであるのです。

◆特集 みんなの学習講座

「銀」と「金」

司会：それでは討論に入ります。どんな質問でも恥ずかしながらお気軽にお願いします。

KU：なぜ「賃金」ではなく「賃銀」なんですか。

FT：僕の直感では外国の硬貨は銀色のものが多いので、別に違和感はありませんでした。

HG：金が希少で多く流通させることができないため、中心は銀貨として銀本位制でお金が流通していたからではないでしょうか。

須藤：ポンドという名称語源はフレン語の天秤を意味するリーブラで、当時は高純度の銀が多く、銀貨が中心になっていました。

司会：ある意味FTさんの直感は間違っていないかったということですね（笑）1935年がこのテキストの1刷ですが、「賃銀」と訳者の長谷部文

雄さんは書かれました。「賃金」という表記が一般的になったのは金本位制になって以降、第二次大戦後からだっただようです。

労働者階級の原動力となる問題

司会：それでは次にレポーターから、疑問点や議論してほしい箇所などあれば出してもらえますか？

大西：前置きの部分で、マルクスの「諸君に退屈な思いをさせる・・・」の退屈というのはどういう意味なのか。司会：私は、マルクスが聴衆に向かって、わかりきっていることを説明し、諸君にひどく退屈な思いをさせるけれども、伝えておく必要があるということだと思います。

KH：経済学の話は勇ましかったかいう話でもなく、退屈な話であって、知っていても仕方ないという細かいところから話していかなくてはならないの

で、とにかく退屈だということだと思えます。

司会：冒頭でマルクスが言っていた、現象を見たら理解できるだろうということですね。

KH：そんなこともあってそういうことをコマゴマと説明し、それを聞くのも退屈だろうということでしょう。

柳本：マルクスはウエストンの主張について、エンゲルスと手紙のやりとりをしています。ウエストンの戯言たわぶにいちいち取り合って、進みつつある『資本論』の一部を今つまむように取り出して反論するのは馬鹿馬鹿しいと言っています。しかし、ストライキが拡がってきている情勢のなかで、この先労働者階級の原動力となる土台になる問題であることから、しっかりと反論しておくべきという結論に達したということですね。

◆みんなの学習講座

資本家の賃下げ攻撃は

愚かなのか

NY：資本家が賃下げを要求することが愚かだとありますが、なぜでしょうか。

司会：指摘の箇所は「賃金の一時的値上げを強要しようとする労働者たちの行動が愚かであるならば、賃金の一時的値下げを強要しようとする資本家たちの行動も同じく愚かであろう」というところですが、レポーターはどうでしょうか。

大西：ウェストンの主張としては一貫して「賃金額は固定している」と言い、それを理由に労働者が賃金の値上げを強要することが愚かであるというわけです。では反対に賃金額が固定しているのに資本家が値下げを行うことは許されるのか。あくまでウェストンの主張である「賃金額の固定」を前提とするならば、それもまた愚かなことであ

るということです。

賃銀が上がれば物価が上がる

AD：当時この演説を聞いている参加者は、日々の生活と照らし合わせて理解できたのでしょうか。いやそもそも納得できたのでしょうか。

司会：一般大衆でなく、インターナショナルに集まった人に向けて演説しています。『物価史』など様々な統計的な資料についてはこの時代にもありました。

須藤：そして生産力やら生産物の量、物価や貨幣の価値など何もかも固定せず、変動しているのは明らかだろう、みんな知っていることだろうということです。ウェストンの言う固定を前提としている時点で議論は破綻しているのです。でもあえてウェストンの主張する固定という前提で考えてみるとどうなるかということを行っています。

TS：いろいろな考え方を持っている集まりのなかで、あえてその土俵に一度乗った上でその誤りを正していったのですね。

HG：ウェストンはあくまでその考え方を持つ集団の一人であり、マルクスはウェストンに敬意を払いつつ、その考え方に沿って議論を展開し、否定することで、その考え方の誤りを全体に広げたのでしょうか。

須藤：ウェストンは労働者の賃上げにより物価が上がると主張しています。本当にそうなのかと。マルクスは後々労働力の価値を説明するために、それをまず否定してから議論を展開しているのです。

TG：今でも御用学者は賃金を上げると物価が上がると言っていますね。その考え方は今も主流でないでしょうか。労働組合の組織率からしてもそう思われている労働者は多いと思いますね。

◆特集 みんなの学習講座

アメリカの資本家と

イギリスの資本家

須藤：アメリカとイギリスの労働者の賃金の比較ですが、アメリカの労働者賃金が高いという状況になっています。これがどういふことかという点、当時

アメリカは開拓のためヨーロッパ、特にイギリスから労働者が多く派遣されました。広大な土地で労働者を定着させ、働かせるためには高い賃金を支払うしかなかったという時代背景があるのです。

IU：牧師の話が出てきますが、信じる神様が同じであるにも関わらず、それぞれ別の国で違うことを言うという矛盾を指摘した例え話ということでしょうか。

須藤：つじつまが合わないということですね。

司会：アメリカでもイギリスでも資本家は同じくどん欲に利潤を上げようと

しますが、資本家の考え方に違いがあるのか、他に違いが生まれる条件があるのかということ、先ほど須藤さんが説明した時代背景からも賃金額を決定する条件に違いがあったということですね。

KH：賃金は資本家の意志によつて決定されているようだけれども、決定するなにか条件があるのだろうかという問いかけですね。

資本の蓄積と生産力

大西：資本の蓄積が、生産力が発展したということの意味するところという理解をしてよいのでしょうか。

HG：生産力が発展するということは資本が蓄積されることを意味して、当然工場が大きくなり、機械も増え、働く労働者も増えるということですね。理理解して良いかと思えます。

司会：つまりは固定していないという

ことですね。生産力も大きくなるし、生産物も増えるということで、常に変動していることは明らかでしようと言っているわけです。現象から本質を導き出しながら、しかもウェストンの主張に乗つたうえで、マルクスは反論していくわけです。

柳本：資本家の意志は、確かに、できるだけ多くの利潤を追求することです。われわれの問題なのは、資本家の意志を論議することではなくて、資本家の力、その力の限界、およびこの限界の性格、賃金の本質、資本主義の仕組みを理解することが大切です。

司会：大西さんありがとうございます。このマルクスの反論は5章まで続きます。私たちが固定した考え方でなく、物事は変化するという考え方で学習に臨む必要がありますね。